魚拓の文化を登別に

「5年前に室蘭港に寄港した豪華客船の船長に魚拓をプレゼントしたことがあります。大変喜んで、船長室に飾ると言っていただきました。魚拓となった登別の魚が、フェリーに乗って世界を旅していると思うとわくわくしませんか」と笑顔で語る黒澤さん。

江戸時代に記録方法の一つとして発案されたとされる『魚拓』。現在では、魚に墨を塗り、紙に転写する『直接法』に加え、魚に紙や布をのせ、その上から綿を布で包んだタンポという道具を用いて着色していく『間接法』といった技法により、表現豊かな作品が多く作られ、その芸術性は海外でも高く評価されているといいます。

昭和43年から『間接法』での魚拓作りに励んでいる黒澤さんは、日本独自の文化である魚拓を市内でも広げようと仲間を募り、登別魚拓同好会を発足。

「現在加入している11人の会員は熟練した人が多く、見る人の心に深い感動を与えてくれる作品を生み出しています」と話す黒澤さんは、会員への技法伝承に取り組みながらも、たゆまぬ自己研さんに努めています。

▲互いに技術を磨き合う登別魚拓同好会の会員（鷲別公民館）

魚拓にふれる・魅力を知る

多くの人に魚拓をより身近に感じてもらえるよう魚拓の展示会や市民講座を開催したり、市内の小学校や『ふぉれすと鉱山』などで、子どもたちの体験教室を行ってきた黒澤さん。

「最近は、魚に一度も触れたことがない子どもが多くいます。そんな子どもたちも、魚拓作りを体験すると、魚の細部までこだわって色付けし、完成作品を笑顔で持ち帰ります。その姿を見て魚拓の魅力を再確認しています。興味のある人は、ぜひ一度体験してもらいたいですね」と話す黒澤さんは、思いを共にする同好会の会員とこれからもさまざまな場所で魚拓の魅力を発信していきます。

大正14年、登別市生まれ。92歳。
室蘭市内の企業で働いた後、鷲別町で釣具店を開く。本で紹介されていた間接法の魚拓に感銘を受け、神奈川県まで行き、技術を習得。仲間と共に、魚拓作りに励み、現在は登別魚拓同好会と北海道魚拓研究連合会の名誉顧問を務める。

きらり
KIRARI

黒澤（くろさわ） 友義（ともよし）さん（常盤町）

皆さんは魚拓を見たことはありますか。日本独自の文化として古くから行われてきた魚拓が、登別市内においても根付き、人から人へとその文化や技術が伝承されています。

今号では、昭和52年３月に登別魚拓同好会を発足し、登別市だけではなく、北海道の魚拓文化を牽引してきた黒澤さんに魚拓の魅力についてお聞きしました。

魚拓の素晴らしさ・楽しさをより多くの人と共に